■ 博士論文要約版 ■

住民の福祉活動参加プロセスとその要因

── 精神保健福祉ボランティアに焦点化した質的分析 ──

松　本　すみ子*

抄　録

わが国の社会福祉の歴史的展開を振りかえると，常に「住民参加」や「主体形成」が重要な概念として位置づいており，戦後の早い段階から地域福祉を推進する主要な概念とされていた。住民参加の重要性を考えた際，どのような方法論で住民参加を促し，主体形成を促進していくかという具体的な議論を構築していくことが今日的な重要課題となる。

本研究では，効果的な住民参加と主体形成の促進方法を模索するための実際的な理論の構築にむけて，その内実を実証的に明らかにした。M － GTA を用いた質的調査により，地域福祉実践への示唆を，主体形成促進への視座から，①住民の主体形成をプロセスで捉える視座，②住民の内的変容と当事者性の視座，③他者との相互作用性への着目とゆらぎを保障する視座，④多様な福祉教育を展開する視座，⑤活動参加への関心傾向と参加促進を提示した。

Keywords：地域福祉推進，住民参加，住民の主体形成，M － GTA，精神保健福祉ボランティア

Ⅰ．研究の背景

わが国の社会福祉の歴史的展開を振りかえると，常に「住民参加」や「主体形成」が重要な概念として位置づいていた。「住民参加」は1950年代終盤に地域福祉実践の中で言われ始め，1960年に開催された都道府県社会福祉協議会組織担当者会議（通称「山形会議」）において「住民主体の組織原則」という用語で議論が交わされた。また，「主体形成」は「住民主体」の議論として1970年代前半より研究者により理論化が図られ，その後，住民の「主体形成」として構築されていく。

このように，「住民参加」や「主体形成」は，戦後の早い段階から地域福祉を推進する主要な概念とされていた。そして今日，多様化する地域福祉問題に対応すべく，「社会福祉法」や「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」においても，地域福祉を推進する主体としての住民の役割が明記されている。今日，コミュニティ

* Matsumoto, Sumiko
東京国際大学人間社会学部

ワーカーをはじめとする地域福祉推進をその役割とする福祉専門職には，住民参加や主体形成促進にむけてのアプローチに関する支援方法，すなわちどのように住民参加を促すのか，その中でいかにして主体形成を促進していくのかに関する，より具体的・効果的なアプローチ方法を模索することが求められている。

Ⅱ．先行研究の未解明点と研究目的

周知のとおり，社会福祉とりわけ地域福祉の分野において「住民参加」や「主体形成」の先行研究には多くの蓄積がある。しかし，ここでは紙幅の関係上，従来の研究における未解明点のみを整理し，それらを踏まえて本研究で取り組むべき目的を提示する。

先行研究においては，住民参加や主体形成の重要性は繰り返し主張されてきた。しかし，理論研究が主であり，実際に住民がどのようなプロセスを経て主体を形成していくのか，そこにはどのような促進要因が関連しているのかについての実証的な研究は十分とは言えない。また，住民の福祉に対する意識変容は，ボランティアなどの活動や運動への参加による実践的経験によりすすむとの指摘もあるが，住民がどのようにして活動に参加していくのかについての実証的な研究も途上である。

地域福祉推進にあたって住民の果たすべき役割が重要であるという現実，そして今後もさらに期待が高まることを見越せば，どのような方法論で住民参加を促し，主体形成を促進していくかという具体的な議論を構築していくことは重要であろう。すなわち，適切で効果的な住民参加と主体形成の促進方法を模索するための実証的な研究の構築は不可欠である。

上記から，本研究では住民参加と主体形成の促進に向けて，その内実を実証的に明らかにすることを目的とする。どのように住民参加や主体形成が促進されるのか（プロセス），そこに関連する要因にはどのようなものがあるのかを実証的な研究方法により明らかにする。

Ⅲ．研究方法

本研究では，調査対象者を精神保健福祉ボランティアに設定し，調査方法に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M－GTA）を用いた。

１．調査対象者

精神保健福祉ボランティアとは，精神障害者の生活を支え，豊かにすること，精神障害者と共に生きる社会づくりなどを目的に活動するボランティアのことである（平 2004: 333）。ここに限定した理由は，2点である。1つは，精神保健福祉が住民参加や住民の主体形成の必要性が極めて高い領域だからである。わが国の精神障害者をめぐる法制度の動きは，長きにわたる精神科医療機関への隔離収容政策から，現在は精神障害者の地域生活の実現が施策の中心に据えられている。しかし地域に目を転じると，充分な受け入れの土壌があるとはいえず，施設設立をめぐる反対運動が多発している。住民が精神障害を抱えながら生きる人たちへの理解を深め，自分らしく生活することのできるまちづくりを目指し取り組む力を涵養すること，すなわち主体形成の促進は不可欠かつ喫急の課題なのである。第2の理由は，今日，精神保健福祉問題がクロスカッティング・イシューとして位置づいているということにある。クロスカッティング・イシューは横断的問題と訳されることもあるように，他の様々な課題に共通する問題のことである。今日，高齢者福祉や子ども家庭福祉，また貧困問題など社会福祉が直面するさまざまな課題に精神保健福祉問題が関連する傾向が高まっている。地域福祉領域やコミュニティソーシャルワーク実践においても，精神保健福祉問題は避けて通ることのできない大きな課題として位置づきつつある。

２．調査方法

本研究では，調査方法にグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，GTA）を用いた。そ

の中でも修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M－GTA とする）を採択したが，その理由は，本研究では住民が精神保健福祉ボランティア活動に参加するに至るまでのプロセスと，その中における住民の変容の多様さ，複雑さ，微妙さも明らかにしたいと考えたことに依拠する。M－GTA は，①プロセス性をもった理論を生成していく研究に適しており，②データを切片化しないために，コンテクストの中での解釈や意味を読み取ることができ，③実践的な活用のための理論生成の方法である，という特長をもつ。また，本研究が導き出した現象特性を，他の同様の実践においても活用を想定していることから，M－GTA を採用した。

３．調査のプロセス

(1) 調査対象者とデータ収集

調査対象者は，精神保健福祉ボランティアとして活動している住民の中で，以下の全ての条件を満たしている人とした。①精神保健福祉ボランティアとして現在も活動をしている人，②活動内容は，精神障害を抱える人たちとの直接的交流を伴うものであること（具体的にはサロン活動，外出活動，イベント，社会復帰施設などでのランチサービス等），③その活動を定期的に行っていること，④複数回の面接実施が容易であることとし，調査協力について了解を得られた 20 名である。調査対象者のサンプリングは理論的サンプリングを基本におき，GTA の特性である比較法を使ってスノーボール式サンプリング法の組み合わせによって行った。調査対象者の内訳は，男性 3 名，女性 17 名の計 20 名であり，年齢は 40 代 1 名，50 代 1 名，60 代 13 人，70 代 5 名である。精神保健福祉ボランティア継続年数は，最短で 3 年，最長で 18 年で，平均は 8.6 年であった。インタビューは，調査対象者に個別の半構造化面接を倫理的配慮の下で実施した。調査は 2008 年 3 月～ 2009 年 3 月の 12 ヵ月間で実施し，分析を進めながらデータ収集を行った。データ収集については，言語データを録音機材（IC レコーダー）に録音し，観察部分は面接者のノートに記録した。言語データを文章化し，ノートなどの情報を含めながらデータを整理し，それをトランスクリプトに換えた。分析作業は，このトランスクリプトを用いて行った。インタビュー時間は，一人あたり最少で 52 分。最大で 93 分。平均は 68 分で，20 名の総計 1417 分（23 時間 06 分）。トランスクリプトは，A4 用紙（1 ページ 1600 字）257 枚となった。

(2) 分析手順

M－GTA の分析では，データから概念を生成し，そこから概念間の関係をカテゴリーで説明する分析プロセスをたどる。本研究では，まず 4 人のデータを読み込んだ。それらを熟読するうちに，多様な経験や生活歴をもち，また精神障害あるいは精神障害者に対する異なったイメージや認識をもつ住民がさまざまなきっかけと出会い，活動を始めるか否かで悩み揺らぎながら，さまざまな人とのつながりの中で自分自身をみつめ，これからの人生を考えつつ次第に意識や態度を変容させ活動開始に向けて歩む姿や，活動を継続・展開する中で，精神障害者やグループの仲間，関係機関の専門職など他者との直接的な関わりを通して，自分や自分たちの活動の意義，今後の活動への展望を見出しつつ，目の前にある福祉問題を見据え，その解決に向けて主体的に担い手となり歩んでいる住民の姿がみえてきた。そこで，本調査での分析テーマを「住民が精神保健福祉ボランティア活動を開始し展開する中で，福祉実践の担い手としての主体を形成していくプロセス」とした。そして，分析焦点者を「精神保健福祉ボランティアの活動を通して福祉実践の担い手となっている住民」とした。その後，分析ワークシートを作成し，類似例・対極例を意識し GTA の特徴である継続的比較検討分析を進め，結果図の作成を行った。この間，分析の偏りを避けるために，分析スーパービジョンを定期的に受けている。尚，データ収集と分析を同時に進行する継続的比較検討分析を行い，データと概念形成や概念間の関係

などを検討しながら進めていった結果，18・19・20 人目にはバリエーションの増加は見られたが，新たな概念は生成されなかった。従って理論的飽和化に達したと判断し，17 人目までを分析データとして扱うこととした。

(3) 研究倫理上の措置

インタビュー実施にあたっては，「ルーテル学院大学研究倫理委員会」の審査を受け承認との判定を得ている。（申請番号 07-31　2008 年 2 月 26 日）

倫理内容は，1．個人情報保護について，2．説明に関する事項（説明の方法，説明する事項）である。以上を，調査対象者に対して文書および口頭で説明し質問を受け，同意書に署名をもらった。

Ⅳ．調査結果と考察

1．ストーリーラインと結果図

M－GTA では，結果は概念図で示される。本論では，まず分析によって得られた結果の全体のストーリーラインと結果図を提示する。その上で，「活動開始まで」及び「活動継続・展開期」の段階のストーリーラインと結果図を示し，考察を論じていくこととする。

(1) 全体のストーリーラインと結果図（図 1）

分析の結果，最終的に採用した概念は 42，サブカテゴリーは 10，カテゴリーは 7 であった。また，以下のような全体像が得られた。これをストーリーラインで示す。文中の［　］はサブカテゴリー，【　　】はカテゴリーをあらわしている。

ストーリーライン

住民が福祉の担い手としての主体を形成するプロセスは，【多様な体験・関心・認識】をもつ住民が，【きっかけとの出会い】を通して活動に参加することを考えはじめる。その後，［ためらいにとらわれる］と［踏み出しに向けてのスイッチ・オン］の間で揺れ動く【始めることへのゆらぎ】によって活動開始に踏み切っていた。

そして活動を開始した住民は，［活動に魅了される］と［困難や戸惑いとの直面］との間の【葛藤にゆらぐ】経験を経て，【活動継続への着火】に至り，それは，［乗り切る方法の活用］や［先が見通せるようになる］［続ける原動力］［活動場所へのこだわり］からなる【深化サイクルの発動】によって【自分なりの次なる展望】を形成していた。

これを図示したものが，図 1 である。

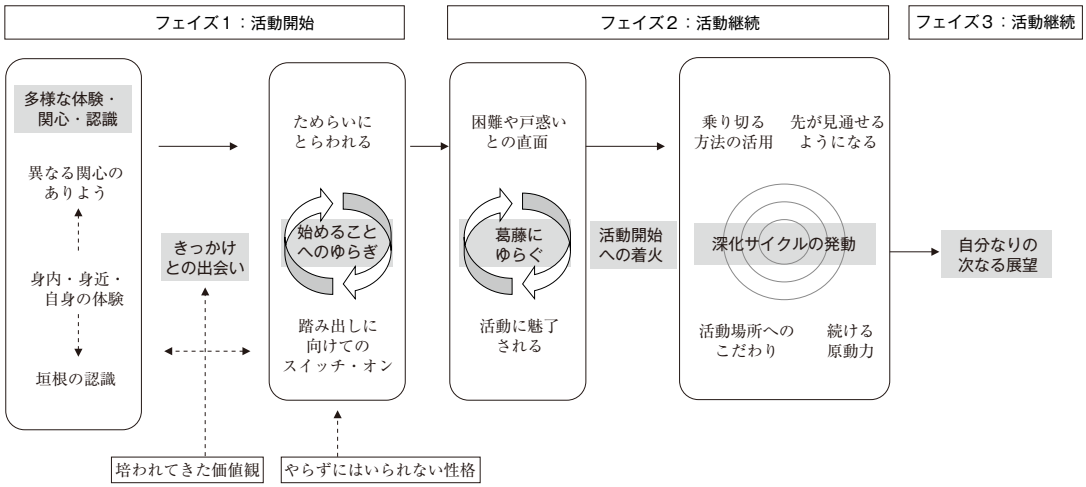

図 1　全体の結果図：住民が活動参加により主体形成していくプロセス

(2)「活動開始まで」のストーリーラインと結果図（図2）

次に，「活動開始まで」の段階のストーリーラインと結果図を提示する。分析により，以下のような結果が得られた。生成された概念は16，サブカテゴリーは4，カテゴリーは3であった。まず，ストーリーラインを示す。文中の〈　〉は概念，［　］はサブカテゴリー，【　】はカテゴリーをあらわしている。

ストーリーライン

住民が精神保健福祉ボランティアの活動を開始するにあたっては，多様な【きっかけとの出会い】と【始めることへのゆらぎ】が必要となる。

住民は，精神障害に対して多様な認識を持っている。例えば，〈身内・身近・自身の体験から〉精神障害を身近に感じる感覚を強めて，それが精神障害への〈わきあがる関心〉にも影響を与えていた。しかし，この身近に感じる感覚が精神障害は〈特別なものではないという意識〉につながる一方で，〈偏見という高い垣根〉を作ることにもつながっており，体験から生じる精神障害への［垣根の認識］は一様ではなかった。また，住民の中には精神障害へ［わきあがる関心］を芽生えさせている人がある一方で，精神障害に特には〈関心・こだわりはない〉人もあった。

このように住民は精神障害に対して多様なイメージや認識をもち，また関心の度合いにも濃淡があるが，その住民が精神保健福祉ボランティアを開始するにあたっては，まずはいくつかの，そして多様な【きっかけとの出会い】が必要であった。ボランティア育成，あるいは啓発・広報を目的とした〈講座の受講がきっかけ〉となっていた一方で，精神保健福祉ボランティア活動が，それまで〈やっていた活動の延長線上〉にあったため自然に開始につながることや，活動内容に関する情報を充分にもっていない状態での活動への〈偶然な参加〉，良く知っている人や信頼している知人など〈知り合いの誘い〉など多様なきっかけが存在していた。

とはいえ，【きっかけとの出会い】によって，即，住民が活動を開始するとはかぎらない。住民の中には，それによって活動への関心を高めてはいたものの，同時に，精神障害が〈よくわからないというためらい〉や，私にできるのだろうかなどの〈さまざまな思いに揺れる〉という［ためらいにとらわれる］状況が生じる場合もあった。そして，これを乗り越え，実際の活動開始に向けてそっと背中を押したのは，〈踏み込んでみたい思いがあふれる〉〈個人的なメリットへの期待が高まる〉〈一緒なら安心〉という［ふみだしに向けてのスイッチ・オン］が生じることであった。

そして，これら一連のプロセスには，住民個々の人や福祉に対する〈培われてきた価値観〉や〈やらずにはいられない性格〉の2つのコンテクストが影響を与えていた。

これを図示したものが，図2である。

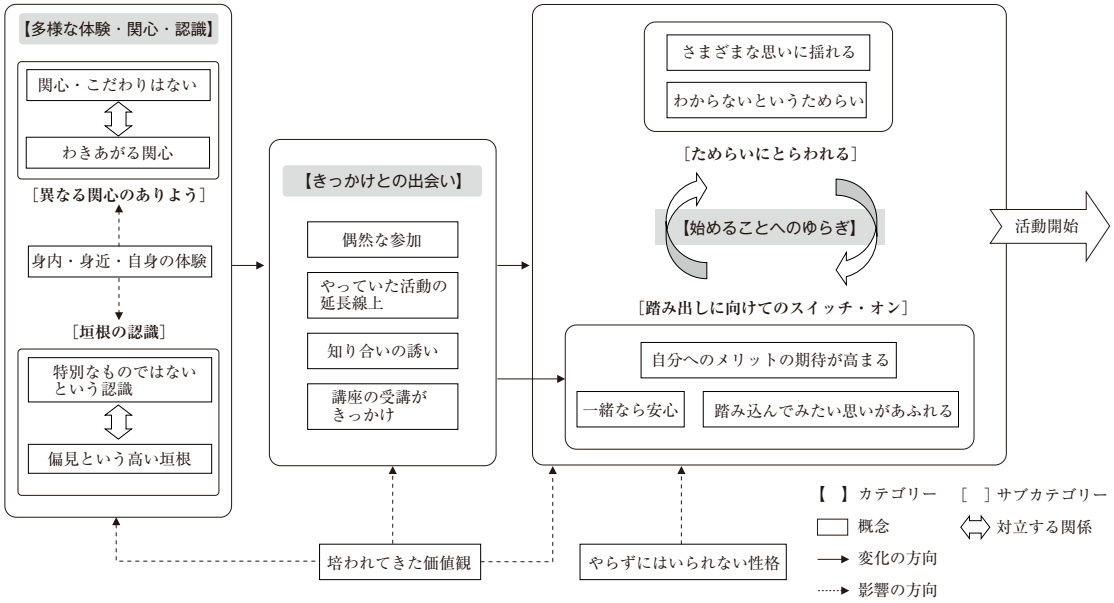

図２　結果図：「活動開始まで」のプロセス

(3)「活動開始まで」のカテゴリーごとの結果と考察

このプロセスにおいて注目されることは，次の２点である。１つは，住民の【多様な体験・関心・認識】である。ここは，〈身内・身近・自身の体験〉［異なる関心のありよう］［垣根の認識］で構成されている。活動を開始する以前の住民が有するこうした多様性は，活動開始後，そして活動を継続・展開していく過程において活動の固定化・画一化を防ぐ役割が期待され，その実践内容に多様性をもたらす可能性を秘めている。注目する点の２つ目は，【始めることへのゆらぎ】である。住民の中に生じた行きつ戻りつのゆらぎが，活動開始に向けてそっと背中を押す大切な役割を果たしていた。さらにはこのゆらぎの中で，活動を通して自分自身へ返ってくるメリットや自分の生活，人生への洞察も行っており，その結果，精神障害者を支えたいというような他者へ向かう志向にとどまらず，自己志向性も見出すことに至っていた。

ここでは紙幅の制約上，①住民のもつ【多様な体験・関心・認識】，②多様な【きっかけとの出会い】，③【始めることへのゆらぎ】，④土台をなす〈培われてきた価値観〉と〈やらずにはいられない性格〉のみ詳説していく。

①住民のもつ【多様な体験・関心・認識】

住民は活動開始の前に，精神障害に関して２つの［異なる関心のありよう］を持っていた。１つは，何かをきっかけにして精神疾患や精神障害，精神障害者あるいは精神保健福祉に対する関心が自分の中に芽生える〈わきあがる関心〉である。もう１つは，〈関心・こだわりはない〉であり，とりわけ精神障害への関心も，精神障害者と関わる活動へのこだわりも持っていないことである。そして，〈身内・身近・自身の体験〉は〈わきあがる関心〉に影響を与えており，*「私の場合は近所にそううつのかたがいらして，（中略）健康センターなんかに相談にいったらどうですかと言っているんですけれど，本人が行きたがらないということで。そんなことで精神に興味をもちはじめて（ボランティア）講座を受けたんです。13」*と述べているように，こうした体験が基となり，精神障害への関心をふくらませていた。

しかしその一方で，体験をもっていても活動とはつなげては考えていない住民もみられた。サラリーマン現役時代に精神疾患に罹った部下を持ち関わった経験のある男性は，*「結局定年後は，ボランティアをやってみたいなとは思っていたんです。（中略）せっかく定年になったので，じゃあ始めようかというところから始めたのですけど，精神かどうかってあまり意識はなかったんですけど。4」*と述べている。このように，〈身内・身近・自身の体験〉が必ずしも活動開始の決定要因とはなっていないことが結果から見いだされた。

②多様な【きっかけとの出会い】

こうした多様な意識・認識・価値観や偏見をもつ住民が活動につながるためには【きっかけとの出会い】が必要であった。〈講座の受講がきっかけ〉は，精神保健福祉ボランティア育成講座などの受講がボランティア活動開始への引き金につながったことである。受けた講座の内容が印象に残り問題意識を高めた住民や，講座終了後に活動につながるきっかけが提供された住民もあった。しかし，もっと偶然性の高いきっかけとの出会いをもつ場合も見出された。良く知っている，あるいは信頼関係のある知人から活動への参加を誘われたことが活動開始のきっかけにつながった〈知り合いからの誘い〉や，それまで行っていた活動や，やりたかったけれども願いが叶わなかった活動の延長線上に精神保健福祉ボランティアが浮上し，開始のきっかけにつながった〈やっていた活動の延長線上〉がある。そして〈偶然な参加〉は，活動内容に関する情報を全く，あるいは充分にもっていない状態での偶然な活動への参加が結果として活動を開始するきっかけにつながったことである。*「クリスマスのリースを作るんで来ないって言われて。で，大きなリースをつくって，それが楽しくてね。9」「ものづくりは第２木曜日にやってるのよって言われて，それなら続けられると思って入ったんですよ。で，精神っていうのは全くわからないままで。7」*と述べているように，それが精神保健福祉ボランティアの活動であるということを知らずに参加したものの，楽しくて結果的にグループに入って活動を開始したという住民もあった。このように，住民が出会ったきっかけは，必ずしも精神障害やそれに関連する問題に連動するものばかりではない。そして，特徴的であったのは，従来からの知り合いであったか否かには違いはあるものの，これらのきっかけとの出会いの多くが他者とのつながりの中で生じていたことである。それは，ボランティア同士のつながりである場合もあるし，リース作りなどを通して出会った精神障害者である場合もある。

③【始めることへのゆらぎ】

とはいえ，これらの多様な【きっかけとの出会い】によって，即，住民が活動を開始するとはかぎらない。中にはそれによって活動への関心を高めてはいたものの，同時に*「嫌っていう意識は全くなかったです。ただ分からなかったです。4」*といった精神障害がいったいどういう病気や障害であるのか〈よくわからないというためらい〉や，*「ボランティアは私にはできないと思い込んでましたから，私。役に立ちたいという思いはそれはちょっとあったけれど，そんな高尚なものは私にはできないと思ってたから。10」*という〈さまざまな思いに揺れる〉という［ためらいにとらわれる］状況が生じる場合もあった。そして，こうした心情や状態から抜け出し，これを乗り越え，実際の活動開始に向けてそっと背中を押したのは，［踏みだしに向けてのスイッチ・オン］であった。住民は，この［ためらいにとらわれる］と［踏み出しに向けてのスイッチ・オン］の間を行きつ戻りつしながら，次第に踏みだしに向けてのスイッチが入り活動開始につながっていた。この［踏みだしに向けてのスイッチ・オン］には，次の３つの概念が見出された。１つには，学びっぱなしにしないことや，講座で学んだことをより深く理解したい，精神障害者の抱える問題に関与してみたいという思いが自分の中でふくらむ〈踏み込んでみたい思いがあふれる〉がある。しかしそうした福祉問題への関与の意味合い

だけでなく，活動を始めることによって自分自身にもたらされる様々な〈自分へのメリットの期待が高まる〉や，この人と一緒だったら大丈夫という安心感である〈一緒なら安心〉が見出された。〈自分へのメリットの期待が高まる〉は，*「いろんな人と関わっていける中で自分を磨いていけるかなあって。13」「定年になる前からですね，ゴルフしたりとかそういうの苦手でね。やることなくなっちゃったら困ると思ってね。6」*と表現されているように，住民は活動開始を考える際，精神保健福祉問題に関与するということに加えて，今までの自分の生活を振り返り，これからの自分の人生や生き方などにも思いを巡らせていた。自分自身や生き方への模索との直面化が生じていた。

④土台をなす〈培われてきた価値観〉と〈やらずにはいられない性格〉

また，活動開始にあたる一連のプロセスには，幼少時の体験や親との関係，生活環境などによって培われた福祉や人に対する〈培われてきた価値観〉や，その人が持つ性格傾向や性格特性である〈やらずにはいられない性格〉の２つのコンテクストが影響を与えていたことも明らかになった。*「私ってね，おせっかい，おせっかいな性格なの。2」「高校のときから元気で，ファイトさんって呼ばれていた。12」*など，もともとの性格傾向が，活動開始に至る一連のプロセスに影響を与えていた。また，*「（母親から）あなたね，人はみんな5本の指に運命をもっているのよ。人って絶対に差別してはダメって育てられたんです。11」*など，それまでの生活や人生の中で培われてきた人に対する一定の価値観や，*「同じ人間で生まれてきてね。何かしてあげたいと思うんですよ。12」*という思いにつなげていた。

(4)「活動継続・展開期」の結果

続いて「活動継続・展開」段階の結果を述べていく。分析の結果，以下のような全体像が得られた。尚，生成された概念は26，サブカテゴリーは6，カテゴリーは4であった。

これを，ストーリーラインで示す。文中の〈　〉は概念，［　］はサブカテゴリー，【　　】はカテゴリーをあらわしている。

ストーリーライン

住民は，精神保健福祉ボランティア活動を継続・展開する中で，【葛藤にゆらぐ】と【深化サイクルの発動】により福祉実践の担い手としての主体を形成していた。

住民は，精神障害者と直接的に関わる活動により，今まで抱いていた精神障害者への〈イメージが変わる〉ことや，さまざまな出来事ややりとりをとおして〈あたたかな気持ちに包まれる〉経験をしていた。また，〈スキルを自分のものにする〉や〈変わっていく自分自身〉に喜びを見出し，活動の場が〈居心地のよい自分の居場所〉へと次第に位置づき，〈活動に無我夢中〉となり［活動に魅了される］。しかし，その中でも住民は自分たちが〈軽度の人と関わっている自覚〉は持ち続けていた。

一方で，ボランティア活動は〈自己満足？〉ではないのか，あるいは〈私にできるのか？〉という思いや，〈活動の困難さに戸惑う〉こと，〈問題の深刻さに戸惑う〉経験をしていた。また，精神障害者の言動に対して〈理解できないこともある〉と受け止めたり，活動を共にしながらも〈ぬぐえない仲間への違和感〉に戸惑うこともあり［困難や戸惑いと直面］していた。

住民は，この［活動に魅了される］と［困難や戸惑いとの直面］の間を行きつ戻りつしながら【葛藤にゆらぐ】経験をし，それを経て，次第に〈はまる〉感覚を高め，精神障害者が直面している厳しい現状に〈湧きあがる憤りや疑問〉を膨らませ【活動継続への着火】を生じさせていた。そして住民はそれを，〈専門職のサポートで乗り切る〉〈学びへのアクセスを良くしておく〉といった［多様な方法を活用する］ことや，〈活動の展望が開ける〉〈自分たちだからこそできること〉などへの気付きの中で［展望が開ける］，さらに周囲から〈認めてもらう誇り〉，活動を〈続ける

メリットを大切に思う〉といった［続ける原動力］による【深化サイクルの発動】により一気に深めていた。そして住民は，〈新たなステージへと飛び立つ〉〈現状を何とか維持する〉〈マイペースで専念〉といった【自分なりの次なる展望】へと自分なりの活動展開につなげていた。

このプロセスにおいて特に注目することは，【葛藤にゆらぐ】である。結果からは，住民が福祉の担い手として主体形成していくプロセスは決して一直線ではないことが明らかになった。常にためらいや戸惑いの中で行きつ戻りつの葛藤の中で，少しずつ歩みを進めている住民の姿である。精神障害者と直接的な関わりをとおして，精神障害者からかけられた言葉などのさまざまな言動に〈あたたかな気持ちに包まれる〉ことを経験したり，今まで抱いていた精神障害者への〈イメージが変わる〉こと，そして〈変わっていく自分自身〉に喜びをみいだしたりする一方で，〈ボランティアへのためらい〉や〈活動の困難さに戸惑う〉，〈問題の深刻さに戸惑う〉ことと直面している。住民は，この相反する対極の間で揺れ動いていた。住民の主体形成プロセスは，決して一方向でも一直線でもなく，また不可逆的なものでもない。揺らぎ戸惑う中での形成という現象特性が見出された。尚，結果図は以下の通りである。

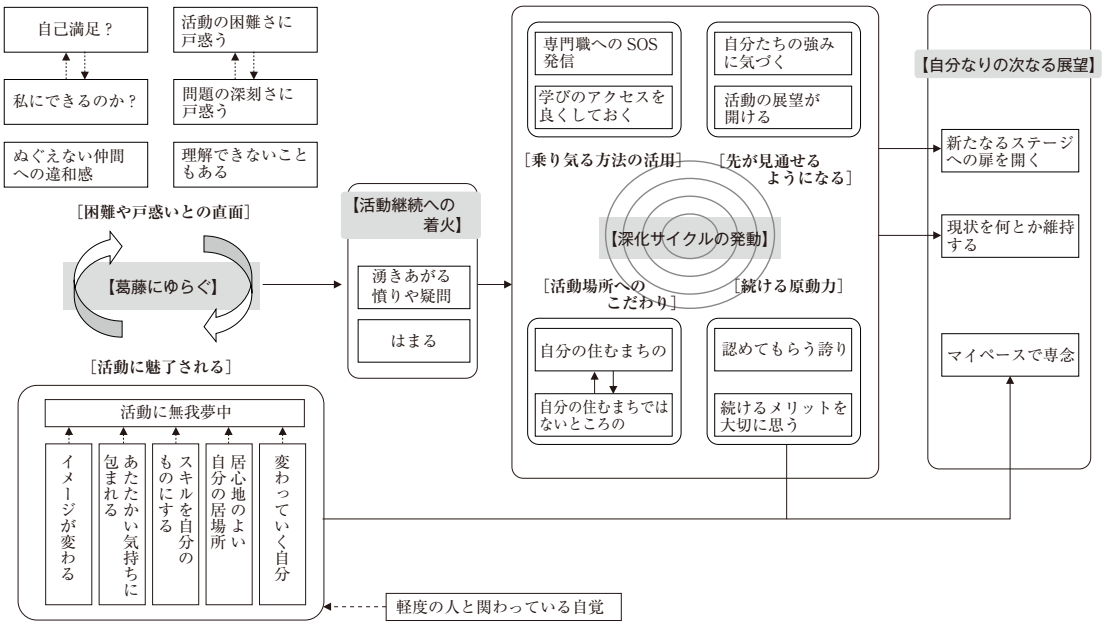

図３　結果図：「活動継続・展開期」の主体形成プロセス

ここでは紙面の制約上，①活動に魅了される，②乗り切る方法の活用，③自分なりの次なる展望，のみ詳説していく。

①［活動に魅了される］

活動を開始した住民は，精神保健福祉ボランティアの［活動に魅了される］。これは，〈活動に無我夢中（in vivo code)〉〈イメージが変わる〉〈あたたかな気持ちに包まれる〉〈スキルを自分のものにする〉〈変わっていく自分自身〉〈居心地のよい自分の居場所〉によって生じたものであった。そして，そこには自分たちが〈軽度の人と関わっている自覚〉が影響を与えている。

以下，それぞれの概念ごとにみていく。

〈イメージが変わる〉

この概念は，直接的な接触体験によって，もともと自分が持っていた精神疾患や精神障害，精神障害者へのイメージに変化が生じることである。*「○○（小規模作業所の施設名）にうかがっている限りでは，健常者とそんなに変わらないって言うか。みんな心根はやさしいし，いい人たちがいる感じがして，私は抵抗がないんですけれどね。15」*と述べるこの住民は，小規模作業所に週３回の割合で定期的に通い，主にランチサービスをしている。そこで出会う精神障害者との関わりを振り返り，料理という精神障害者と共に行動するという活動を通して，自身の中の偏見の少なさに言及している。一方で，*「（誘われた卓球大会に行って）で，その時，精神ってそんなにあれしてなかったんですよね。そしたら，○○さんがそばにきて『全然わからないでしょ？』って。『みんな，こころに病いをもっている人たちなのよ！』って。でも，明るいし，うん。普通に接しられたんですよね。14」*という初回の関わりの中でイメージ変化を自覚した住民もある。定期的かつ直接的な関わりの中で，徐々に変化が生じていたものと考えられる一方で，インタビューデータ No.14 のように初回で変化が生じていた。変化が生じるのに要する時間は，このように個人差がある。

〈あたたかな気持ちに包まれる〉

この概念は，精神障害者との直接的な関わりの中で，言われたこと，してもらったことなどをうれしいと感じ，あたたかい気持ちに包まれることである。*「おいしいなんて言ってくれると，ああ，うれしいわって。16」*と述べるこの住民は，小規模作業所で週３回のランチサービスを継続的に行っている。自分たちの作った食事を利用者（精神障害者）においしいと言ってもらえることに喜びを感じており，活動への評価に対する手ごたえも得られていると思われる。活動を継続している原動力がここにうかがえる。

*「（長女の）受験の事を大変心配してくれる方もありました。上手くいくように思ってますって。ね。その，ぶっきらぼうな方なんですけれども。そういう方もあったり。14」*と述べるこの住民は，日々の活動の中で，精神障害者から投げかけられた言葉，してもらったことに対して「うれしい」と感じたと述べている。とりわけ大きな出来事であるとは思えないが，日々の関わりの中での小さなできごとに喜びを見出している。

このカテゴリーで注目すべき点は，以下の３点である。まず１点目は，住民が自分たちの活動を評価してもらえることに喜びを見出している点である。２点目は，精神障害者との直接的接触体験を通して，自分の存在価値をみいだすことに喜びをみいだしている点である。３点目は，承認と受容（受け入れてもらえること）への安心感である。ここで重要なのは，いずれも，直接的接触体験であったからこそ，より強く，より鮮烈に住民の心に響いたのであろうという点である。

〈スキルを自分のものにする〉

この概念は，さまざまな失敗や困った経験を経て，自分なりの対応スキルを獲得することである。活動において，精神障害者との関わりにとまどったりつまずいたりする経験は誰でもある。その時に，対応のコツを自分なりに模索し蓄積していく作業が必要となる。*「身体（障害）は目に見えますが，精神（障害）は見えないので。身体（障害）は何をしてあげたらいいのかがわかりますが，精神（障害）は。考えながらやっていたんですが，同じ人間としてつきあっていくのがいいのかなと思うようになりました。9」*と述べているように，この住民は精神障害を目に見えない障害と捉え，かつ活動として何をしていいのかがわかりにくいと感じている。そして，その対応方法として，さまざまな模索・思考錯誤を繰り返しながら，それを通して自分なりの方法を見出していた。

また，精神症状に依拠する対応の難しさに関しては，*「いろいろな症状で話ができる人とできない人がいたので，こういうふうに接したらいいのかなって思いながら通っていました。5」*と述べ，目に見えない障害というとらえ方ではなく，

精神症状というより具体性の高い次元での対応への戸惑いを感じていた。周知のとおり，精神障害は疾患と障害が共存しているのが大きな特徴である。そしてそれは治療の場面にとどまらず，ボランティア活動の場面でもしばしば生じてくる。症状によって自分たちの対応が左右されることを経験するが，住民は，当初，それに戸惑ったり怖いと感じたりしている。やがて関わりの継続と模索を通して，徐々に対応方法を獲得していたことがうかがえる。このように，ボランティアの中に精神障害者への難しい対応の仕方について，以下の試みが行われていることが明らかになった。1つは，模索・思考錯誤である。自分なりのやり方を探し，試している。2つは，今までの自分の経験やスキルを活用しようとしていた。3つには，自分なりの方法を獲得していることである。専門職養成の場面とは異なり対応マニュアルや専門的な指導がない中で，住民は自分なりの対応方法を獲得していた。そして，結果的にそれが喜びにつながっていた。

〈居心地のよい自分の居場所〉

この概念は，ボランティア活動の場や精神障害者と共に過ごす場が，背伸びをせずにそのままでいられるなど，自分にとって居心地がよい居場所となっていることである。

*「負担に思う時もあるけれど，張り合いはありますし，恵まれていると思うし。ざっくばらんで，ここちよく一緒にさせていただいているんです。15」「ボラが優先。やっぱなんだかな……居心地がいい。1」*と述べているように，活動の場が心地よい自分の居場所となっている。また，サラリーマン経験をもつ住民は，*「何か，会社の延長のようなグループが。やっぱりそういうところは自分には合わないって思いますね。○○（ボランティアグループ名）にはないですね。お互いに理解しあうっていうか，何でも話すっていうか，それで決めていくっていうところですね。6」*と，サラリーマン時代の組織との対比をしながら，ボランティアグループの方が自分に合っていると感じていることに言及している。

これらの結果から見てとれる居心地の良さは，関係性に依拠するものが大きい。居心地の良さには，物理的環境の快適さや安全性という要素もある。しかしここではむしろ，心理的環境の快適さが住民から表現されている。そして，それを醸し出しているのは，精神障害者との関わり，そして活動を共にしているボランティア仲間との関わりとの間で生じている安心感によるものが大きいと解釈した。ボランティア活動は目的をもつ活動である。しかし，企業のような画一化された没個性的な目的追求とは異なった，協働性・合意性を伴った目的追求の色合いの濃いグループであることが関連していると考えられる。

〈変わっていく自分自身〉

この概念は，活動での精神障害者やボランティア仲間との直接的接触体験を通じて，自分自身に変化が生じること。そして，それに気づくことである。

*「えっと価値が変わったっていいますか，この世界に入ってきて，なんて言うんでしょう私は比較的短気で，短気であの，なんかあるとすぐあーだこーだってこう言ってきたほうなんですよ，それが全く逆転しまして，えー，話を聞くっていうそういうふうに自分のその，えー，生活のあり方が変わってきたが，こう，変わってきたのかなっていうのがあります。4」*と述べている。この発言からは，精神障害者との関わりの中で，自分と他者との相対化が生じていることが見てとれる。インタビューデータ No.4 の住民は，サラリーマン経験をもつ。企業の中では，自己表現や自己主張をする場面が多くあったが，ボランティア活動を開始してからは，話をきくことを大切にしてきた。これは，精神障害者との関わりの中で獲得したスキルであるが，それによって自分自身の他者への対応や，生活そのものにも変化が生じてきたことを自覚していると言及している。また，インタビューデータ No.13 の住民は，活動を通して精神障害者個々の持ち味や良さに目が向くように

なった。それによって，自分自身にも変化が生じたと感じている。さらには，*「息子に変わったっていわれますし，主人に対しても，優しくできますものね。13」*のように，変化を他者から指摘される場合がある。

〈活動に無我夢中〉(in vivo code)

この概念は，【活動に魅了される】のカテゴリーの中心概念である。活動を楽しいと感じ，自身の日常生活の中に位置づけ，活動に無我夢中になることである。ある住民は，

「やっぱり行って，おしゃべりしに行くのが楽しくて。1」「一種の生きがいなのかな！お茶も教えていたりしたんですけれど，やめちゃいましたもんね。魅力なくなっちゃった（笑）10」

など，活動の楽しさを表現している。インタビューデータ No.10 の住民は，長いこと自宅で茶道の先生をしていたという。が，活動を開始してからは活動の楽しさに魅了され，とうとう辞めて，ボランティア活動に専念することにした。そしてこの住民は，*「そんなことで続けていたら，ある時ね，活動を終えてバスに乗るとなんか幸せな気分になるの。10」*と述べている。また，*「出なきゃならないってなったら家の中のこともサッサとやりますしね。何にもないと，ちらかしたまんま。お化粧もしませんしね。1」*と，活動が日常生活に位置づいており，それが張り合いになっていることがうかがえる。

活動参加が精神障害者を支えることという他者志向的（other-oriented）動機だけにとどまらず，こうした自己志向的（self-oriented）動機もまた自覚されている。そして，活動に夢中になっていることを認識している。活動を楽しいと感じることは，活動の継続や展開に大きな影響を及ぼすと解釈できる。

②［乗り切る方法の活用］

このサブカテゴリーは，活動をする中で直面する活動の困難さや，精神障害者が抱える問題の深刻さなどの厳しい状況を打破するため，住民が〈専門職への SOS 発信〉や，さまざまな研修や講演会，勉強会，また本やテレビ等から情報を得るなどの〈学びのアクセスを良くしておく〉ことなどによって，直面している問題を乗り切るための方法を獲得し活用することである。

〈専門職への SOS 発信〉

この概念は，活動を進めていく中でわからないことや困ったこと，課題などを抱えた時に，専門職から教えを得たり，アドバイスしてもらうなどのサポートをしてもらって乗り切ることである。*「わかんないことだらけなんですよね。社協の女性に相談しながらやっているっていう感じですよね。助かっていますよね。6」*これは，単に困った時やわからないことと直面した時に，SOS を発信して乗り越えるということだけにはとどまらない。もちろんそこで社会福祉協議会や，精神保健福祉士などの専門的な知識や経験を有する専門職に相談し，アドバイスをもらうことで乗り切ることができているが，もう一面には，相談できる人がいるということも住民に安心感を与えており，活動を継続していくための大切な要素となっていると考えられる。

〈学びのアクセスを良くしておく〉

この概念は，講座・講演会の受講や勉強会への参加や施設・活動見学，また自分で本を読むなど学びの機会を確保することによって，問題の突破口の模索や自身の向上，意識や認識の変容，活動への新しい意味づけや意義づけを行うことであり，こうした機会へのアクセスを良くしておくことである。*「(講座を通して）やっぱりね，こういう勉強の場が必要ですしね，1 年に 1 回はやっぱりね。活動だけでなく，こころがピッとね，がんばらなくちゃって思いますしね。13」*と，学ぶ機会の大切さを述べている。活動を継続する中で，ブレや方向性を見失うという体験をしている。当初は自分たちが自ら望み考えて活動していたはずなのに，気が付くと目の前のことに追われ，施設を利用している精神障害者のリクエストに応じる

ことがタスクとなり，その達成が「やらされている」感覚にすりかわってしまうことに戸惑うが，講座など学びの場が，自分たちが何のために活動しているのかという原点に立ちかえる大切な機会提供となっていた。

③【自分なりの次なる展望】

住民は，活動の【自分なりの次なる展望】を模索し歩んでいた。このカテゴリーは，〈新たなステージへと飛び立つ〉〈現状を何とか維持する〉〈マイペースで専念〉の３つの概念により構成されている。住民はボランティア活動を継続する中で，それぞれの次なる展望を見据え，そこに向かって歩んでいた。しかし，その方向性は必ずしも同一ではなく，その住民個々人によって異なりをみせていた。ここで重要なのは，あくまでも自分なりの展望であるという点である。

〈新たなるステージへの扉を開く〉

【深化サイクルの発動】により，【自分なりの次なる展望】を抱き具体的な行動に移していく住民の姿が明らかになった。その原動力ともいえる【深化サイクルの発動】によって，住民の中には，従来の活動から別の活動を始める住民もあった。このカテゴリーは，ボランティア活動が元となり，さらに一歩深めた支援への関心が高まり，新たな展開へと歩みを進めることである。

*「（精神障害者の施設に）非常勤（職員）として勤め始めたんですよ。2」*と述べるように，この住民は，ボランティア先であった小規模作業所の非常勤職員として勤務し始めた。施設の職員からの要望であったが，すぐに決心したというわけではなく，そこには不安や迷い，戸惑いが生じていた。最終的には，施設利用者からの非常勤職員になって欲しいとの熱い思いであった。尚，この住民は，現在は正職員として採用されている。また，*「まあ，そんな事をしているうちに。えっとー，あのー，落ちる落ちると言いながら，（精神保健福祉士の）国家試験を受けました。1」*と述べるこの住民は，活動がきっかけとなり，もっと勉強してみたいという思いを募らせ，精神保健福祉士の国家資格を得るために通信制の養成校に入学している。1年半の過程と現場での実習を終え，国家試験に臨んでおり，見事合格を果たした。こうした活動を通したつながりの中で，〈新たなるステージへの扉を開く〉機会が提供されている。

また，専門職にはならないが，自分たちの活動をさらに発展させていた住民もあった。

*「（市の）活動運動会。障害者が入っていないんですね，そこには。身体も，知的も，もちろん精神障害も。で，障害者を入れた運動会はいろいろと大変だとは思うんですがね，やはり地域で障害者も取り込んでやるっていうのが必要だと思うので，2年前からね。5」*と述べているように，精神障害者と関わる活動を続けるうちに，地域の運動会に障害者が参加できていないことに，ある日，気づく。そして，疑問を抱くようになった。そして，精神障害だけでなく，知的障害や身体障害，そして認知症をもつ人々たちも一緒に参加できる運動会の実現に向けて，奔走を始める。この住民には，地域全体の福祉問題への視野の拡大がみられた。最初の活動は精神障害者を対象としたものではあったが，継続しているうちに，精神障害者だけの問題に限定しない方向性を大切にし始めている。

〈現状を何とか維持する〉

この概念は，活動の現在の水準を何とか保っていくことを，現在の，そして今後の課題としていることである。

*「現状維持が精いっぱい。15」「元気で明るく，今まで通りやっていきたいってことしかありませんね。16」「講演とかもやりたいですけれど，今は現状を，サロン活動をどうやったらいいかを考えていきたい。12」*と，自分たちの役割を，後進の育成に求めていた。概念〈新たなるステージへの扉を開く〉と比較するとやや消極的な色合いがそこには感じられてしまうのは否めないだろうが，決してそうではない。現在行っている活動は

意味のあるものであり，それを衰退させずに継続していくことも，地域福祉推進の上では重要なことである。この，活動を衰退させたくないとの住民の強い思いは，その年齢層とも関係していると推察されるが，【自分なりの次なる展望】として重要な意味を持つ。

〈マイペースで専念〉

この概念は，活動を続けてきた中で，特に精神障害者が抱えている問題や地域に潜む福祉課題などは考えたこともなく，ひたすら自分の目の前にある活動に専念していることである。インタービュー中の調査者の「活動している施設の利用者さんが住んでいるまちには，精神障害をもつことによってどのような生活のしづらさがあるか」との問いに対し，*「そんなこと，考えたこともないですね。7」「考えたことないです。私，そういうのを考えたことってなくて，ごめんなさい。16」*と答えている。この住民は，活動を通して精神障害者が直面している〈問題の深刻さに戸惑う〉こともあまりなく，また，精神障害者が利用できるサービスの貧困さなどへの〈湧きあがる憤りや疑問〉もあまり抱くことはない。ここには，［活動に魅了される］ことや［続ける原動力］に後押しされながら，ただただ目の前の日々の活動をマイペースでこなすことに専念している住民の姿が現れている。

さて，果たして，こうした住民を地域福祉推進への貢献度が低いと断定できるであろうか。確かに〈新たなるステージへの扉を開く〉や〈現状を何とか維持する〉と比較すると，そこに地域福祉推進に向けての積極的な色合いを欠いている印象を抱くのは否めない。しかし，インタビューデータ No.7 と No.16 の住民は，週 3 回の頻度で施設に昼食を作るランチサービスを行っている。一人ぐらしの通所者に栄養バランスのとれた温かい食事を提供すること，一緒に作ることで精神障害者の料理の技術を向上させること，また，おしゃべりをしながら料理を作る中で暖かな時間を共有すること，そしてそれが，地域の中で共に生きる住民同士としてのつながりの構築につながり，精神障害者の安心材料となることなど，これらの住民の果たしている役割は，実は思いの他，大きい。つまり，地域で生活している精神障害者の地域生活を支援している重要な存在なのである。

Ⅴ．結論―地域福祉実践への示唆

本研究では，M － GTA を用いて主体形成の内実に迫った。ソーシャルワーク実践は，実際には存在する支援や関わり，アプローチなどが意識化・概念化されることなく埋もれてしまうことが往々にしてみられる。地域福祉実践も，決して例外ではない。本研究において生成したオリジナルな概念は，見過ごされがちであった実践を概念としてとらえ直したものであり，その概念を用いることによって，地域福祉実践に新たな視点や理解，解釈の道筋をもたらすことができる。

大橋（1997: 41-42）は，主体形成の方法について次の 3 点を提示している。①住民参加，②アカウンタビリティを含めた社会福祉に関する情報の提供，③福祉教育の推進，である。また，杉浦（2006: 41）は，地域福祉の主体形成へのアプローチは論者によって多様であるとしながらも，①地域福祉計画策定など地域福祉の運営への住民参加の徹底，②社会福祉行政のアカウンタビリティ（説明責任）を含めた社会福祉に関する情報提供，に加えて③住民のライフステージの各段階に対応する福祉教育の推進，を挙げている。本研究の結果からも同様の知見が得られたが，同時に，新たな促進方法の提示についての示唆も得られた。

1．地域福祉実践への示唆

以下にこの研究から得られた M － GTA による地域福祉実践への示唆を，主体形成促進への視座から 5 点記す。

①住民の主体形成をプロセスで捉える視座
②住民の内的変容と当事者性の視座
③他者との相互作用性への着目とゆらぎを保障す

る視座
④多様な福祉教育を展開する視座
⑤活動参加への関心傾向と参加促進の視座

以下に，1つずつ説明していくこととする。

①住民の主体形成をプロセスで捉える視座

本調査結果からは，住民の福祉活動参加を通した主体形成プロセスには3つのフェイズがあることが明らかになった。1つは住民が活動に参加するまでのフェイズ，2つは住民が活動を通して個人の内的変容を遂げていくフェイズ，3つは今後の展望を見通し行動するフェイズである。住民の主体形成プロセスは，この3つのフェイズから構成されており，換言すれば，この3つのフェイズの総称が主体形成プロセスである。もちろん本研究は住民の福祉活動参加による主体形成という限定の範囲内で実証研究が行われているので，これを一般化することには慎重であるべきだろう。しかし，コミュニティワーカーをはじめとする住民の主体形成促進に関わる専門職は，このフェイズに即してアプローチや戦略を考えることが必要である。例えば，住民が活動に参加するまでのフェイズでは，多様な【きっかけとの出会い】を住民に提供することや，その後，活動を開始するまでの間，住民には【始めることへのゆらぎ】の感情が生じる可能性があるということを踏まえ，また［ためらいにとらわれる］ことも理解し，その気持ちに寄り添いつつ，［踏み出しに向けてのスイッチ・オン］に力を添えることなどが必要であろう。また，住民が活動を通して個人の内的変容を遂げていくフェイズでは，住民は活動開始直後に［活動に魅了される］と［困難や戸惑いとの直面］により【葛藤にゆらぐ】状態を生じていた。住民は，〈活動に無我夢中〉になりつつも，一方で初めて知る，あるいは初めて目の当たりにする精神障害者の抱える〈問題の深刻さ〉などの［困難や戸惑いとの直面］をしている。その住民の【葛藤にゆらぐ】姿に，専門職は過剰に動揺したり振り回されたりすることなく，これが次のステップに進むために必要な階段であることを理解しながら関わることが必要である。

また，各フェイズごとにもそれぞれ段階がある。例えば，住民が活動を通して個人の内的変容を遂げていくフェイズには，【葛藤にゆらぐ】【活動継続への着火】【深化サイクルの発動】の三段階がある。【活動継続への着火】の段階に対して専門職は，SOSを出してきた際に適切なアドバイスをしたり，また福祉教育などの学びの機会を提供するなど［乗り切る方法の活用］に向けての支援展開が求められる。

このように，主体形成促進においては，ただ漫然と住民へのアプローチを行うのではなく，フェイズごとに区分した住民の変容への理解と，そこで求められる支援を意識しながら関わっていく「住民の主体形成をプロセスで捉える視座」が必要となる。

②住民の内的変容と当事者性の視座

本研究では，今やその地域の地域福祉推進に欠かせない中心的な存在となっているボランティアでさえも，活動開始前には社会福祉やメンタルヘルスには何ら関心のない人（〈関心・こだわりはない〉）がいたことや，活動開始に結びついた【きっかけとの出会い】も，〈知り合いからの誘い〉であったり，〈やっていた活動の延長線上〉など偶然性の高いものであった。さらには，精神障害者に対するイメージとして，〈偏見という高い垣根〉を有していた人も複数あったことも明らかになった。その後，住民は福祉活動を通して福祉の担い手になっていくという内的変容を遂げていた。

この一連のプロセスからは，住民が当事者性を獲得していく姿が見て取れる。ここでいう当事者とは，障害や高齢などによって生活上の課題を抱える人を指すのみではなく，自分たちの身近にある問題や課題に気づき，関心を寄せ，そして「ほおっておけない」と感じ動き出す人をも含んでおり，こうした当事者意識を高めることを当事者性と捉える。

上野ら（2003: 2-3）は，当事者を「問題を抱えた人々」と同義ではなく，自分の現在の状態を，こうあってほしい状態に対する不足ととらえて，そうではない新しい現実をつくりだそうとする構想力を持ったときに，はじめて自分のニーズとは何かがわかり，人は当事者になるとしている。認識するニーズと，それに対する不足との関係で当事者を定義しており，加えてその不足を満たそうとする構想力・行動力との連動で捉えているところに，その特徴がある。また，早瀬（2010: 154-155）は，当事者を「当事者である」人と，「当事者となる」人に分けており，「当事者である」人を，高齢者やその介護者，障害者など，存在として当事者である人とし，「当事者となる」人を，一般的な市民活動のスタイルであり，当初は当事者でない人が，社会の課題と接することで，その課題を他人事ではない自分の問題だと受け止め，直接的にその課題解決に関わろうとする「当事者となる」と整理している。本研究の調査結果からは，当初は社会福祉に全く関心がない（〈関心・こだわりはない〉），あるいは障害者への抵抗感（〈偏見という高い垣根〉）を抱いていた住民が，福祉活動に参加し，活動を継続していく中で精神障害者との関わりをとおして，その言動から〈あたたかい気持ちに包まれる〉体験や，それを通して精神障害者への〈イメージが変わる〉と同時に，どうしてこの人たちが偏見にさらされて苦しんでいるのか，あるいは偏見に基づく差別に直面してあえいでいるのかという〈問題の深刻さに戸惑う〉ことが生じ，【葛藤にゆらぐ】経験をしている。これらは，現実の問題・課題に直接的に触れることで生じていると理解できる。そしてそれは，精神障害者が直面する様々な困難や，精神医療・精神保健福祉の現状，または専門職や行政機関に対して抱く〈湧きあがる憤りや疑問〉に発展し，活動に強い関心や意欲が奮起され〈はまる〉状態に発展する。つまり，現実に起きているリアリティの高い問題や社会の課題と接したことで，それらを他人事ではなく自分の問題として受け止め，その課題解決に関わろうとする「当事者となる」。個人の内的変容を遂げ，そのまちの福祉の担い手になっていく。

コミュニティワーカーをはじめとする住民の主体形成促進に関わる専門職は，こうした住民の当事者性を高めていくという視座のもと，主体形成を促進するためのアプローチや戦略を考えることが必要となる。

③他者との相互作用性とゆらぎを保障する視座

3つには，他者との相互作用性と住民のゆらぎへの着目である。住民は，活動開始に至る段階から活動を継続する間，他者との直接的・間接的接触を行い，そこには絶えず他者との相互作用性が働いていた。他者から提供される活動開始へのきっかけ，不安や戸惑いで思わず踏みとどまってしまう歩みに，一歩踏む出す勇気をくれる他者の存在，今までもっていたイメージを一新してしまうような施設利用者との関わり，活動を認めてくれ自分に自信と誇りを与えてくれる他者の言葉など，さまざまな相互作用の中で住民は前述した3つのフェイズを歩んでいた。

そして同時に主体形成プロセスにおいて重要な要素となるのは，住民の中に生じるゆらぎである。癌ターミナル期における家族研究を行った柳原（1998: 78）は，「ゆらぎは感情がしなる状態，つまり柔軟に揺れ動く状態であり，一定の方向にだけ偏ってしまうことはない，流動的な状態である。」としている。本研究においても，活動を通して住民は自身や他者，問題とのリアリティを伴った直面化の中で生じるゆらぎによって歩みを進め，活動への意欲に火を付け，活動をより進化させていく重要な要素となっていたことが明らかになった。こうした住民のゆらぎは，2つの方向性をもっている。1つは，次なるステップへ歩みを進める方向性であり，主体形成の大切な節目としての要素である。しかしもう1つは，停滞あるいは停止を生む方向性である。ゆらぎは，乗り越えられなかった際に活動へのモチベーションの低下や活動からのドロップアウトの危険性も同時に併せ持っているのである。ソーシャルワーカー

は，住民のゆらぎを弱さとしてではなく活動を進化させる原動力であるという認識に立つこと，そしてゆらぐことを尊重し保障する視点をもつこと，その上で，住民のゆらぎに寄り添い伴走することが必要なのである。

④多様な福祉教育を展開する視座

4つには，多様な福祉教育の展開についての視座である。前述したように，福祉教育は地域福祉推進及び住民の主体形成促進方法として，従来からその必要性が指摘されてきた。本研究でも，生成された〈学びへのアクセスを良くしておく〉が福祉教育と共通性を持つ概念である。

大橋（1983）は，福祉教育を次のように定義している。「憲法第13条，25条等で規定された基本的人権を前提にして成り立つ平和と民主主義社会をつくりあげるために，歴史的にも，社会的にも疎外されてきた社会福祉問題を素材として学習することであり，それらとの切り結びをとおして社会福祉制度・活動への関心と理解をすすめ自らの人間形成をはかりつつ，社会福祉サービスを利用している人々を社会から，地域から疎外することなく，共に手をたずさえて豊かにいきていく力，社会福祉問題を解決する実践力を身につけることを目的に行われる意図的な活動である。」

本研究では，福祉教育の捉え方として，フォーマル・エデュケーション（Formal Education），インフォーマル・エデュケーション（Informal Education），ノンフォーマル・エデュケーション（Nonformal Education）の考え方を取り入れる有効性が見出された。フォーマル・エデュケーションとは実際には学校教育のことを指し，高度に制度化され，階層的に構成された教育のことである（渋谷1990: 43）。また，インフォーマル・エデュケーションは，あらゆる人々が，日常的経験や環境との触れ合いから，知識，技術，態度，識見を獲得し蓄積する，生涯にわたる過程であり，家庭や職場，遊びの場で学ぶ，家族や友人の手本や態度から学ぶ，旅行や新聞・書物を読むことから学ぶ，ラジオの視聴，映画・テレビの視聴を通して学ぶなどが挙げられる（渋谷1990: 44）。ノンフォーマル・エデュケーションは，学校教育（フォーマル・エデュケーション）の枠組みの外で，特定の集団に対して一定の様式の学習を用意する，組織化されて，体系化された教育活動のことである（渋谷1990: 45）。本研究で生成された〈学びへのアクセスを良くしておく〉という概念は，講座・講演会の受講や勉強会への参加や施設・活動見学，また自分で本を読むなど学びの機会を確保することであり，住民は，問題の突破口の模索や自身の向上，意識や認識の変容，活動への新しい意味づけや意義づけをそこから得ていた。実際には，住民はその活動を展開する過程において，必ずしもフォーマル・エデュケーションとしての福祉教育を受けているわけではなかった。むしろインフォーマル・エデュケーションやノンフォーマル・エデュケーションを活用していたのである。コミュニティワーカーなど住民の主体形成に携わる者に必要なことは，福祉教育の推進の際，活動継続中の住民が必要としている福祉教育の中身を迅速かつ正確に把握することであり，そして，その必要としている内容に合致した福祉教育を提供していくことである。つまり，実際に住民は日々の活動の中で，対象とする人たちや活動仲間との触れ合いからさまざまな学びを得ている。こうしたインフォーマルな福祉教育が日々の活動の中で積み上げられていることをソーシャルワーカー自身が認識するとともに，それを促進する支援を展開することが必要である。対象者から学ぶことや仲間から学ぶインフォーマル・エデュケーションが容易に展開されるような，住民あるいはグループへのアプローチが求められる。また，本研究では，住民はわからないことや困ったことに直面した際，〈専門職へのSOS発信〉をしていた。この時，不足している知識の提供や，間違った理解の修正，また活用すると効果的だと思われる支援方法などに関してアドバイスを行うことも，コミュニティワーカーの行う重要な福祉教育の一環なのである。福祉教育は，必ずしも講座や授業を開講することだけではない。

⑤活動参加への関心傾向と参加促進の視座

５つ目は，住民が活動を開始する以前に持つ３つのタイプの活動への関心傾向と参加促進への視座である。ここには，きっかけ提供の観点が含まれる。活動に参加している住民は，必ずしも活動参加へ強い意欲を持っていた人ばかりではなく，実際には関心を持たない住民も活動開始につながっていた。本研究からは，住民が活動開始以前に抱いていた関心傾向として，次の３つのタイプがあることがわかった。１つは，活動したいと希望している住民。２つは，既に活動をしているが特定の領域（本研究でいえば，精神保健福祉ボランティア）には関心のない住民，３つには，活動参加を考えていない住民である。コミュニティワーカーなどの専門職が住民へ活動参加を促す際，「住民」という１つの大きなカテゴリーで捉えるのではなく，この３つのタイプごとに適した効果的なきっかけの提供が必要となる。例えば，「活動したいと希望している住民」を参加へつなげるには，従来のようなボランティアに関する情報提供は有効であろう。しかし，「活動開始を考えていない住民」には必ずしも効果的とは言えない。つまり，多様なきっかけの提供は，単にきっかけの種類を豊富にするということだけではなく，きっかけの提供方法にも工夫が必要で，３つのタイプごとのバリエーションの導入が必要なのである。とりわけ，「既に活動をしているが特定の領域には関心のない住民」や，「活動参加を考えていない住民」に対しては，講演・講座の開催や活動に関する情報提供など従来の方法に加えて，住民同士のつながりやその力動を活用する視点の導入の効果も期待できる。住民が出会ったきっかけは，一見すると全く偶然に提供されたかのような印象を受けるが，そこには単なる偶然性だけでなく，人と人とのつながりによるきっかけの提供であったという共通点が本研究では見出すことができた。「住民同士の誘いあい」が発生する場の保障，つまり住民と住民が出会い，何らかの関わりを通した相互作用性が発生する場の設定が必要となろう。それは，専門職によって計画されたイベントなどのようなプログラムでもあるだろうし，住民同士のインフォーマルなつながりもあるだろう。住民が，インフォーマルなつながりを活用することができるような環境醸成と，活動に関する情報提供や情報交換などが行われる機会の提供という両面のアプローチが必要となる。つまり，既に活動に参加している住民は，他の住民の活動参加を促進する機能をもつと捉えることが可能である。

２．主体形成の概念と活動指向性

最後に，本研究で明らかになった主体形成に関する結論をまとめる。

①主体形成の概念

本研究はＭ－ＧＴＡを用いた実証的研究であるが，その分析の結果，導き出された住民の福祉活動参加における主体形成の概念は以下のとおりである。

「地域福祉に関する諸活動への参加を通し，自分とは異なる他者との出会いとその相互作用性の中で，互いの共通性や差異性とを相対化させ，そこから新しい価値・行動規範を獲得し，共に生きることへの方策の再編を重ね変容していくこと」

つまり，主体形成は単に地域福祉を推進する力を涵養することではない。本研究では，住民が福祉活動への参加を通して，他者との相互作用性の中から自身と向かい合い，自分の人生，生き様などとの直面化を絶えず行い，自身を変容させ成長させていく姿が現れていた。そして，そのプロセスの中において形成された力量や成長の伸びしろを活用して，自分とは違う他者や地域生活上の福祉課題を抱える人々と共に生きる方策を模索していた。

②主体形成の活動指向性──構造的枠組み

前項で示したように，主体形成のプロセスの中で住民は自身の変容を遂げながら地域福祉を推進

するが，この主体形成による住民の活動指向性，つまり主体形成を促進しながら，住民がどのような活動を地域の中で展開していこうと望むのかという活動指向性は，画一的であるよりも多様性に富む方が望ましい。なぜなら，多様な活動指向性は，同時に多様な地域福祉実践を生む。それは，複雑化・多様化の一途をたどりつつある今日の福祉課題に，住民が取り組んでいく可能性を高める。

図４は，主体形成による住民の活動指向性を構造的枠組みで示したものである。

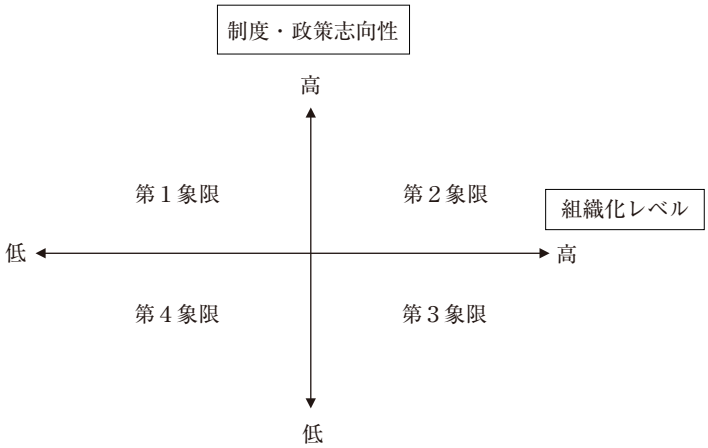

図４　主体形成による住民の活動指向性の構造的枠組み

縦軸は「制度・政策志向性」であり，この度合いが高いのは住民が既存の制度・政策による問題解決を求めていくものである。一方，低いのは，例えば見守りや寄り添い，日常生活上に必要となる簡易な手助けのように，既存の制度・政策を活用しない，あるいは既存の枠組みにはない支援を志向するものである。横軸は，「組織化のレベル」を示している。組織化レベルが高いのは，例えばボランティア団体などのように，グループを形成し活動を展開することを指している。一方，組織化レベルが低いのは，グループなどに所属せず，個人で行う活動を示している。

具体的に，各象限を見ていこう。第１象限は，個人が制度・政策による問題解決を志向するものである。大橋は，地域福祉の主体となる形成課題を，①地域福祉計画策定主体，②地域福祉実践主体，③社会福祉サービス利用主体，④社会保障制度契約主体の４つに整理している（大橋 1999: 99-104）が，「社会福祉サービス利用主体」「社会保障制度契約主体」がこれに当たる。次に，第２象限であるが，ここはグループにより制度・政策による問題解決を志向するものである。「地域福祉計画策定主体」や「地域福祉実践主体」の一部がこれに当たる。第３象限は，制度・政策によらない，あるいはそれでは対応できない課題などにグループで取り組んでいくものであり，第４象限は，個人がそれに取り組むものである。そして，これらの各象限は独立して存在しているものではなく，互いに関係しあっている。

この，住民が福祉活動への参加を通して形成する主体の活動指向性は，本研究で生成された【自分なりの次なる展望】というカテゴリーに相当する。既に第４章で述べているが，この【自分なりの次なる展望】には，〈新たなるステージへの扉を開く〉〈現状を何とか維持する〉〈マイペースで専念〉の３つの概念が含まれている。〈新たなるステージへの扉を開く〉は，ボランティア活動が元となり，さらに一歩深めた支援への関心が高ま

り，新たな展開へと歩みを進めることである。ボランティア活動を継続しているうちに，さらなる展開として障害者福祉計画などの策定委員を引き受けたり，精神保健福祉士の国家資格を取得し，専門職として施設職員になった住民もあった。これは，概ね第１象限及び第２象限に該当する。また，〈現状を何とか維持する〉は，グループの現在の活動水準を何とか保っていくことを大切に思っていることであり，住民はさまざまな理由や限界から〈新たなるステージへの扉を開く〉には進まないものの，自分たちの活動の質を維持しようとしていた。これは，第２象限及び第３象限に該当する。そして〈マイペースで専念〉は，活動を続けてきた中で，特に精神障害者が抱えている問題や地域に潜む福祉課題などは考えたこともなく，ひたすら自分の目の前にある活動に専念していることである。制度・政策には依らず，例えば「暖かく美味しい料理を食べて欲しい」など，関わっている精神障害者への思いに依拠した活動を，グループで日々展開している。これは，第３象限にあたる。

本研究では，ボランティアグループに所属している人を対象としてインタビューを実施したため，第４象限に該当する概念は生成されていない。しかし，地域で抱える諸課題が多様化・複雑化にある今日，「制度・政策の谷間」にある問題の発見・解決・予防のため，今後は，隣人などの個人が支援を必要とする人たちを見守ることや，制度では対応できない，あるいは制度での対応が範疇外であるような簡易の手助けを日常生活の中で提供する働きの意義は大きい。つまり，今後は，第４象限の広がりが必要となるのである。第２章で明らかになったように，従来の地域福祉実践及び研究では第１象限から第３象限への着目が主であったが，しかし今後は，第４象限の充実も視野に入れることが重要である。そして，地域福祉の拡充に向けては，第１象限から第４象限のどこかに偏った活動指向性ではなく，この４つの象限にバランスよく広がった展開が求められる。

Ⅵ．本研究の限界と今後の研究課題

最後に，本研究の限界点と今後の研究課題を述べる。本研究は，調査方法に質的研究方法，とりわけＭ－ＧＴＡを使った。方法論的限定には，分析に用いるデータの範囲が含まれる。従って，本研究でも調査対象者に対する限定をおこなった。その結果，以下の点に限界性が生じている。１つは，精神保健福祉ボランティアとして活動をしている住民に限定した研究であることから，精神障害問題にやや偏重した結果が導き出された可能性がある。２つには，意図したものではなかったが，年齢層や男女比も偏りが生じていたため，結果にある一定のバイアスをもたらした可能性は否定できない。３つには，ボランティア活動を開始し継続している住民を対象としていることから，活動を始めない住民や活動途中でドロップアウトしていった住民に関しては言及できていない。より厚く，正確な結果を得ていくために今後の研究課題としては，第１に【きっかけとの出会い】がありながらも，活動の開始に至らなかった住民の調査を行い比較検討する必要がある。第２に，精神保健福祉ボランティア以外の活動での調査をすることの必要がある。これらを今後の研究課題としたい。

謝辞

調査にご協力くださいました精神保健福祉ボランティアのみなさまに感謝申し上げます。また，本論文の原版である学位論文の執筆にあたりましては，市川一宏先生，和田敏明先生，福島喜代子先生はじめ，ルーテル学院大学の先生がたには多大なご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。

引用文献

早瀬　昇（2010）「ボランティアテキストシリーズ　寝ても覚めても市民活動論――ミーティングや講座の帰り道に読む35の視点」社会福祉法人大阪ボランティア協会出版部
全国社会福祉協議会福祉教育研究委員会（委員長：大橋謙策）（1983）
大橋謙策（1997）「地域福祉の主体形成」日本地域福祉学会『地域福祉事典』中央法規
大橋謙策（1999）「地域福祉」放送大学教育振興会
大橋謙策（2006）「1-1 戦後社会福祉の歴史と地域福祉の位置」上野谷加代子・野口定久・牧里毎治ほか編『新版　地域福祉辞典』中央法規出版
大橋謙策（1991）『地域福祉の展開と福祉教育』全国社会福祉協議会
岡田靖雄（2002）『日本精神科医療史』医学書院
岡村重夫（1973）『地域福祉研究』柴田書店
渋谷英章（1990）日本生涯学習学会編集『生涯学習事典』東京書房
渋谷英章（1990）前掲書　p.44
渋谷英章（1990）前掲書　p.45
杉浦直人（2006）「地域福祉の主体形成」上野谷加代子・野口定久・牧里毎治ほか編『新版　地域福祉辞典』中央法規出版
平　直子（2004）「精神保健福祉ボランティア」社団法人日本精神保健福祉士協会・日本精神保健福祉学会監修『精神保健福祉用語辞典』
中西正司・上野千鶴子（2003）「当事者主権」岩波書店
柳原清子（1998）「癌ターミナル期家族の認知の研究――家族のゆらぎ――」『日本赤十字短期大学紀要第11号』

参考文献

Arnstein. S. R.（1969）, A Ladder of Citizen Perticipation. Journal of the American Institute of Planners.
Available Kish, George B.; Stage, Thomas（1973）College student mental hospital volunteers: Any benefits to the student or to society? Journal of Community Psychology, Vol. 1（1）
Glaser & Strauss,（1967）The Discovery of Grounded Theory
Glaser, B.（1978）Theoretical Sensitivity
Glaser, B.（1992）Basics of Grounded Theory Analysis: Emergence vs Forcing
古川孝順（1998）「社会福祉制度改革――そのスタンスと理論」
井岡　勉（2008）「地域福祉とは何か」井岡勉監修『住民主体の地域福祉論――理論と実践』法律文化社
石川到覚（2001）「精神保健福祉とボランティア活動」石川到覚編『精神保健福祉ボランティア――精神保健と福祉の新たな波』中央法規出版
木下康仁（1999）「グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的実証研究の再生」弘文堂
木下康仁（2003）「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践」弘文堂
木下康仁（2007）「分野別実践編　グラウンデッド・セオリー・アプローチ」弘文堂
これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書（2008）「地域における『新たな支えあい』を求めて――住民と行政の協働による新しい福祉――」
岡田靖雄（2002）『日本精神科医療史』医学書院

Research into the Process and Primary Factors of Citizens' Participants in Welfare Activities

― Qualitative Analysis Focusing on Volunteers Who Provide Services in the Field of Mental Health ―

Matsumoto, Sumiko

When we look at the historical development of social welfare in Japan, "citizens' participation in municipal affairs" and "subject formation" are two important concepts found in promoting community welfare that can be seen even at an early postwar stage.

When the importance of citizens' participation in municipal affairs is considered, it is crucial to construct concrete arguments indicating the kinds of methods that can be utilized to encourage citizens' participation in municipal affairs as well as subject formation.

Through this research, it was possible to give clear empirical proof of the reality of constructing a practical theory for groping with the issue of encouraging effective citizens' participation in municipal affairs and subject formation.

By qualitative investigation using M-GTA, suggestions for community welfare practice from the perspective of encouraging subject formation, the following viewpoints were clarified: 1) perceiving the process of citizens' subject formation, 2) citizens' inner change and the nature of the parties concerned, 3) guaranteeing the attention to the mutual interaction with others, and guaranteeing the citizens' psychological fluctuation, 4) development of diverse welfare education, and 5) the tendency of interest toward activity participation as well as the encouragement of participating.

Keywords: Community work, qualitative investigation, M-GTA, citizens' participation, mental health volunteer